

東京大学文学部日本史学研究室旧保管 「平泉澄氏文書」について

若井敏明

はじめに

東京大学文学部日本史研究室に戦前の教授平泉澄氏（以下、物故者の敬称は略す）にまつわる資料群「平泉澄氏文書」が保管されていた^{〔1〕}（以下、「平泉文書」と略す）。それらは大半が書籍類で、そのほか若干の写真・パンフレット・書簡・学生のレポート・カード・原稿などを含んでいた。平成十三年の冬と記憶するが、筆者はそれらについて調査する機会を与えられた。筆者の怠慢と時間的制約のため、かならずしも十分な調査を成しえなかったが、ここでその概要について報告することとしたい。なお、この資料群のうち確実に平泉澄に関係のあるものは、その後、ご遺族のもとに返却された由である。

一 「平泉文書」の分類

「平泉文書」として一括されていた資料群は、じつはすべてが平泉澄に関係したものでばかりではない（詳細は付表を参照されたい）。まず、戦後に刊行された書籍と、戦後の旧制大学院の学生レポート・旧制学部生の提出ノートなど、戦後の資料が混入している。これらは、敗戦とともに東大を去った平泉とは無関係なものであることは明らかであり、厳密な意味では「平泉文書」とはいえないものである。つぎに、戦前の資料でも、すべてが平泉関係の資料ばかりとはいえない。これらを、書籍と書籍以外の資料に大別したうえで、さらに分類すると以下のようなようである。

(1) 書籍

A 平泉文書A類。平泉自身の署名、平泉への献辞が記されていたりして、平泉澄の旧蔵本であることが確かなものである。一括して「平」の札が付されているものについては、先に平泉とはかわりがないとした「旧制大学院の学生レポート」も同様の札が付されているので、そのみを判定の基準とはしがたいが、一応矛

盾点が認められない場合は、平泉澄旧蔵本に準じて考えてここに含める。さらに平泉が編著者となった書籍についてもA類に含めて考えるべきであろう。

B 平泉文書B類。戦前の刊行物で蔵書印などがなく、その所蔵関係がわからないものである。それらは、平泉澄の旧蔵本である明証には欠けるが、その可能性も否定できないので、一応、平泉旧蔵本に準じて扱っておくこととする。

C 国史研究室等所蔵本。戦前の出版物のうち、蔵書印などによって戦前の国史研究室や史学会、学生文庫の所蔵と判明するもの。戦前の国史研究室や史学会を事実上平泉が主宰していたという点からみれば、これらの資料は平泉とは無関係ともいえないが平泉澄の旧蔵品とは区別すべきであろう。⁽²⁾

(2) 書籍以外の資料

- A 原稿 『栗翁公伝』と大日本文庫本『続日本紀』の原稿。
 - B 平泉が指導した学生の文集 『史園』第一輯(上)と『修学旅行記』四部。
 - C 史料集 『菊池勤王史』執筆のための『菊池勤王史料』。
 - D カード 『建武中興忠臣調』。
 - E 写真
 - F 大正年間の専科生の卒業論文。
 - G その他 平泉への書簡、一般人の原稿など
- このうち、Fは平泉と直接かかわりはない。またEの写真については、これらの写真の裏面に記された地名と番号は、左表のように、ほとんど、大正四年次の調査に関する黒板勝美『朝鮮史蹟遺物調査復命書』所載「参考資料写真目録」(黒板勝美先生誕生百年記念会編『黒

板勝美先生遺文』吉川弘文館、一九七四年)に合致する。

整理番号	地名	参考資料写真目録の番号と内容記載
51-2	忠州一	高麗時代初期弘法大禪師墓塔及新羅時代ノ鉄仏
18-6	亀浦一	亀浦甘筒浦ノ古城址
18-2	金海五	倭城ヨリ哥谷山城ヲ望ム
18-1	船津一	新築城ノ遠望
18-12	船津三	新築城附近ノ遠景
18-9	河東一	蟾津江ノ河口
18-14	河東一七	岳陽面ノ山城址城門附近ノ一部
18-3	順天一	倭城ノ遠望
18-11	順天二	同三ノ丸ノ遺址
18-13	順天四	同城壁ノ一部
18-3	順天五	城壁ノ一部

また整理番号18-4「忠州郡庁庭内安置 海天寺弘法大禪師実相塔 塩田禎介氏寄贈」もこの時のものである。さらに、整理番号18-7、8、10、15に関しては、7、8に「黄海道鳳山郡砂里院古墳発見 帶方太守張撫夷傳」とあるので、黄海道方面の調査をおこなった大正五年度のものであろう。このように写真類は黒板勝美の朝鮮調査旅行のものなのである。したがって、(2)「書籍以外の資料」のうち、平泉関係のものは、A、DとGに限られると思われる。

以上のように、「平泉文書」には平泉澄とは無関係なものも混入していることが明らかとなったが、以下、多少とも平泉とはかかわりをもつと思われる戦前の資料について、若干の観察結果を報告したい。

二 「平泉文書」の観察

(1) 書籍

このなかで平泉澄との関係が明瞭なのは、平泉澄の旧蔵本であることが明らかなA類である。平泉文書A類の書籍には、平泉の所蔵本、平泉への寄贈本、「平」の札を付けて保管されていた書籍、さらに教科書や平泉が編著者となった書籍の残部が含まれる。

そのうち、平泉の所蔵本は岡村金太郎『往来物分類目録』である。平泉は『中世に於ける社寺と社会との関係』に於いて往来物を素材として中世の教育を論じたが、そのなかで、岡村理学博士が「上代より最近世に亘つて一千二百種の往来物を集め、近年その研究の一端を『世界小学教育』の一篇として発表せられた」と述べ（二六三頁）、『往来物分類目録』の書名も挙がっている（二七〇頁）、本目録はその時の参考文献のひとつとみることができる。ところで、『往来物分類目録』の発行年月日は大正十一年十一月十二日である。『中世に於ける社寺と社会との関係』巻頭の「発刊の辞」によれば、「大正十一年六月一日起稿し、四箇月にして功を終へ」たが、「往来物の中には其後新に発見研究する所あつたが故に之を加へ入れる事にした」とあるので、この目録は平泉が往来物を「新に発見研究する」際に利用したのである。

つぎに「平」の札を付けて保管されているものとしては、『田口卯吉全集』と『世界之東郷元帥』（邦文と英文）、『公家鑑』と『雲上明鑑』がある。これらの書籍の所蔵経路などは不明だが、『田口卯吉全集』については、黒板勝美が編輯・解説した第一巻「史論及史伝」は

「印刷に際しては全体に涉つて平泉澄氏の厳密なる校訂を経た」（第一巻「例言」）由なので、その縁があるのかもしれない。

さらに、『江都納言願文集』、『後法興院記』、『大橋訥庵先生全集』など、平泉が編著者となった書籍がある。寺田剛「校訂 關邪小言」もこれに準じるものといつてよからう。『校訂 關邪小言』の一冊には、本文に平泉の書き入れがあつて、演習での教科書と思われる。また、奥付に「以印刷代謄写／昭和九年秋／青々」とある『柳子新論』は、青々塾で使用していた教材であろう。彼は昭和十年一月から三月、および九月から十月にかけて、集中的に『柳子新論』の講義をおこなつており、昭和九年秋に印刷されたこの本が使用されたとみて矛盾しない。なお、『校訂 關邪小言』を用いた演習については、節をあらためて述べたい。

つぎに平泉への寄贈本がある。ただし、本稿では寄贈先を明記していない本についてはB類に含めた。B類はすべてが平泉関係のものとは断定できず、寄贈本も平泉へのものではない可能性もあるが、平泉以外の教官への寄贈本がない点からみても、宛て先を明記しない寄贈本も平泉へのものであつた可能性が高い。いま、A類・B類を通じての寄贈本と寄贈者は以下になる（○はB類）。

- | | | | |
|-----|-------------------|----------|-------|
| 24 | 寺子屋の意義・語史及び起源について | 石川謙（著者） | 大正十五年 |
| 1 | 塩竈神社史料 | 山下三次（宮司） | 昭和三年 |
| ○50 | 弘前藩小史と贈位者考 | 森林助（著者） | 四年 |
| 7 | 箱根神社大系・上 | 小林健三 | 五年 |
| ○53 | 昭和六年の国史学界 | | 七年 |
| 8 | 吉野朝時代に於ける讃岐の | 長町與彦 | 八年 |

	一大勤王事蹟		
	沿道ノ史蹟	池田俊彦	十年
22	楠公余薫	佐賀楠公会	十年
○ 63	小野粹伝	坂本喜治馬	十年
○ 65	奥羽に於ける交通の発達	大島延次郎(著者)	十一年
25	水戸藩に於ける水府流の沿革	荷見守文(著者)	十一年
○ 76	枕書堂遺草	矢島堅蔵	十一年
○ 80	日支交通と船舶国籍證	森克己(著者)	十三年
26	本尊美翁追憶録	刊行会	十三年
○ 89	神武天皇御東征と熊野	太地五郎作	十四年
○ 91	愛日 六卷六号		十四年
○ 119	昭和十三年度古蹟調査報告	朝鮮古蹟研究会	十五年
○ 135	越中順逆年表		十六年
○ 97	攷事撮要	京城帝国大学	十六年
○ 98	伽具土之研究	川口興道(著者)	十七年
13	神代帝都考	末松偕一郎	十七年
14	五雄藩皇国精神講義		十七年
○ 104	大國主命	山本三郎(著者)	十九年
15			

これだけの資料からは何程のこともないが、平泉が黒板勝美の跡を襲つて教授に就任した昭和十年から寄贈が増えている傾向は指摘できるかも知れない。ただし、これらの書物はたまたま研究室に残つたものであり、彼の蔵書や彼への寄贈本の全てでは勿論ない。また『後法興院記』上下巻の包みに「やけてかまはぬもの 平泉」と書かれていることからわかるように、研究室に置いていた書物は平泉に

とつて重要度が低いものであつたらしいことも考慮すべきであろう。

なお、B類の書籍については、寄贈の旨が記された書籍以外にも多くは寄贈本であつた可能性が高いように思われるが、その弁別は容易ではない。また、B類の書籍すべてが平泉関係とはいえないことも先に述べたとおりであつて、たとえば、大正十、十一年の史蹟名勝天然記念物調査関係の書類は、そのなかに「黒板所蔵」の印を押ししたものがあるように、黒板勝美関係のものである。黒板は昭和十年まで東大に在職していたから、それ以前のものについては黒板関係であつた可能性があろう。

(2) 書籍以外の資料

ここで平泉との関係が確実なのは、すでに述べたようにA、D及びGの項目である。このうちAの『楽翁公伝』の原稿については後に述べるので、それ以外について簡単に触れておきたい。

まずBの学生文集は、『史園』と『修学旅行記』がある。『史園』は昭和二年に作成された学生の文集で、『平泉文書』中に残されているのは第一輯上である。「東海乗春開史園／瓊枝秀葉列翠繁／応期霜露十年後／喬樹蒼々成鬱林」という平泉の序文を付し、「昭和第二龍集丁卯／大簇上澣／平泉 澄(花押)」という年紀と署名がある。目次には、「真言宗發展と常陸」(市村其三郎)、「女人政治管見」(江木謙蔵)、「楽市管見」(小野均)、「八戸藩に行はる打毬につきて・福昌寺所蔵の大概若経について」(高橋重五郎)、「近世史開拓者としての織田信長の歴史的意義」(小林健三)、「短編小説二篇」(及川健助)、「吉田松陰の対外論」(岡田実)、「甲賀武士の研究」(田山信郎)、「中世の市に就きて」(大久保利謙)、「日本古代に於ける女子君長制度」(井手一馬)の諸編の名が並んでいるが、上巻に含まれているのは岡田実の

作品までで、残りは下巻に収録されたのであろう。ここに論文を寄せている学生は一九二五年入学組で、昭和元年十二月に書かれた作品が多いので、二年生の冬季休暇の課題であったと思われる。多くが翌年昭和三年に卒業するが、その卒業論文の題目のうち、井手一馬「日本原始古代に於ける女人政治」、小野均「近世城下町の研究」、田山信郎「中世に於ける武士の共和的団結」などは、ここでの研究を発展させたと思われる。また、江木（秋山）謙蔵も琉球を題材としている点では、卒論の「中世に於ける琉球の国際的地位」に繋がる面があるといえよう。一九二五年入学組の学生は、平泉が自宅で講読会を開くなど熱心に指導し、学生も平泉を中心にとまっていたという⁽⁴⁾。この文集は初期の平泉の学生との関係をうかがわせる資料である。

現存の『史園』に第一輯とあるので、この学生文集は毎年作製する予定であったらしいが、その後も引き続きおこなわれたかどうかは判断としない。ただ、学生の書いたレポートを製本して保存するということは、水戸修学旅行に際しておこなわれている。水戸の修学旅行は昭和七年から毎年秋に一年生を率いて実施されたもので、「是等の地を踏み、是等の人に触れる事こそ、国史を理解してその神髓を会得する上に、最も有効である」⁽⁵⁾との考えから、平泉が力をいれたもので、水戸学や北畠親房ゆかりの地を訪ねるのが主行程であった。したがって、歴史の実地に学ぶという性格とともに、欧米から帰国したあとに平泉が展開した学内での学生教化活動の一環とも位置づけられるものである。

『史学雑誌』43—12に載った昭和七年度の「修学旅行記」に「今回の旅行の学究的成果は、国史研究室に残すべき分担執筆報告書一部份内に結晶する筈であり」とみえるから、当初から旅行に関する学生報

告書の作製が企図されていたらしい。現在「平泉文書」には、昭和十三年度から十六年までの『修学旅行記』しか残っていないが、研究室には修学旅行の記録が別に保存されているらしいので、それらのなかにその前後のものがあるのかも知れない。ただし、「平泉文書」中の昭和十三年度から十六年までの『修学旅行記』に限って見てみると、それらのレポートから卒業論文へと発展した例は見出せなかった。二年生が自由に題材を選んで作製した『史園』所載の論文とは違って、『修学旅行記』の報告は一年生ということもありあくまで旅行に題材を取った一時的なものだったといえそうである。以上の『史園』と『修学旅行記』は、平泉の学生指導の実際を知るうえでの貴重な資料といえよう。

Aの『続日本紀』の書き下しの原稿は、大日本文庫の原稿用紙に書かれたもので、本文庫の原稿であったことは明らかである。大日本文庫本『続日本紀』は、上巻が昭和十三年に発行されているが、下巻は刊行されなかったらしい。「平泉文書」に残る原稿は後半の巻二十から四十までのもので、本文と簡単な頭注を付し、一部に訂正の筆が加えられている。上巻の解題で平泉は平田俊春を煩わして読みつけたことと、喜田新六・宮田俊彦が協力したことを述べる。おそらく、下巻の原稿も平田らが訓読したものに平泉が訂正を加えたのであろう。

大日本文庫は、昭和九年に春陽堂が創業六十周年を記念して企画したシリーズで、国体篇・神道篇・儒教篇・仏教篇・勤王篇・武士道篇・心学篇・芸道篇・国史篇・地誌篇・文学篇の計百冊を刊行する予定であった。平泉はその国史篇を担当し、『日本書紀』・『続日本紀』・『日本後紀』・『続日本後紀』・文徳実録』・『三代実録』・『大鏡』・増鏡』・『吾妻鏡』・『神皇正統紀』・愚管抄』・『大日本史』・『読史余論』・『藩翰

譜』を校訂することとなっていた。このうち、『続日本紀』以外に、『日本書紀』（昭和九年）、『神皇正統紀・愚管抄』（十年）、『日本外史』（十一、十三年）、『大鏡・増鏡』（十一年）、『大日本史』（十二年、一巻のみ）が刊行されているが、他は刊行されなかったらしい。校訂については、『日本書紀』は内海秀夫・久保田収、『日本外史』は金子得之助、『大鏡・増鏡』は平田俊春、『大日本史』は鳥巢通明・中川秀幸氏の協力を得た（各巻解題）。『神皇正統紀・愚管抄』は協力者の名がないので自ら校訂にあたったのであろう。なお、大日本文庫版の『続日本紀』は上巻のみで断絶した故か、その後の研究でもあまり言及されない。『日本書紀』についても最新の小学館版『日本書紀』に校訂本・テキストとして掲載されていないから、大日本文庫そのものが忘れられているのであろう。

ちなみに平泉は東大に職を得てから一貫して『吾妻鏡』の演習をおこなっているが、その一方で『後法興院記』（昭和二、三年）、『神皇正統紀』（七、十、十二年）、『愚管抄』（八年）、『三鏡』（九年）の演習・研究もおこなっている（十三年から日本思想史を兼任することになってからは国史の演習は『吾妻鏡』のみ）。大日本文庫の校訂にそれらの成果が生かされたと思われるが、演習の内容が未詳なのでなんともいえない。

Cの『菊池勤王史料』は、原稿用紙を製本した、菊池氏歴代の個人別、二十五冊にわたる史料集である。このなかから平泉は史料を採用して代表作のひとつ『菊池勤王史』を執筆したのである。『菊池勤王史』については、その「はしがき」に、昭和十三年二月一日に着手し、三年の歳月を経て、十五年秋に筆を執り、十二月二十九日に脱稿したという。そこには「常に予を助けて、史料の広汎なる蒐集、綿密なる

整理に当られたる平田俊春、松本純郎、佐々木望、高木成助、関敦、名越時正、藤村禪、村尾次郎、原正等の諸学士」とみえるので、『菊池勤王史料』は彼らによって蒐集・整理された史料であることがわかる。なお、平泉が『菊池勤王史』に採用した史料は、この『菊池勤王史料』の一部にすぎない。平泉自身が『菊池勤王史』の中で、「其の詳密は更に後日を待つ事として、一先づ概要を発表すべし」とか「ただ概略の記述に止まり、考證も猶不十分であつて、詳密は之を將來に譲るの外はない」と述べている。だが、この史料集を踏まえた詳密なる研究は、ついに発表されなかった。

Dのカードは、『太平記』や『大日本史料』などから事蹟を抜き書きした人名カードで、三つの箱に保管されている。添付された表によれば、それは『建武中興忠臣調』と題され、内訳は、本カード五六五枚、整理分一〇二四枚、除去分四一五枚である。このうち除去分とは贈位のあつた者（一一九枚）、重複した者（二〇九枚）、姓名不明（九一枚）、「賊軍」に入った者（九六枚）の計四一五枚で、姓名訓方不明の者一〇枚が未整理となっている。これを見るに、この調査は「忠臣」のうち未贈位の者をリストアップしたものであることが判明する。ただ、本カードと整理分に重複したものはないので、除去された者以外の「忠臣」をさらに二分したと思われるが、両者の違いが筆者にはまだよくわかっていない。この調査がおこなわれた時期については、『御贈位アリシ列名』六六名を列挙したカードに付されていた凡例に「昭和十年十二月」という日付がみえるので、この時期には調査がすすんでいたと思われる。ちょうど建武中興六百年を迎えた時期であり、贈位の参考にしたのかもしれない。これらの原稿、史料集、カード類は、平泉の実証的な研究方法を検討するために、重要な資料

となるであろう。

最後にGとして、①「小楠公の研究」(一)と題した原稿(四十三枚)と、②平泉宛の書簡がある。①の原稿は、著者が山本三千雄(京都市右京区西院巽町三六)で、受領を示す印からみて、大学ないし平泉宛に昭和十四年五月に送られて来たものであろう。②の書簡は、福岡市荒戸町二五 木下瀬太郎のもので、著作呈上の挨拶状と思われる。両者とも詳しい事情については未だわからない。

以上、「平泉文書」の内容について簡単に観察した。はじめに述べたように、史料の内容にまで踏み込んだ本格的な研究は成しえなかったが、『楽翁公伝』の成立と『校訂 關邪小言』の演習については、節をあらためてもうすこし詳しく論じたい。

三 『楽翁公伝』の成立過程

「平泉文書」のなかに『楽翁公伝』の原稿がある。『楽翁公伝』は複雑な成立過程を経て、洪沢栄一著として出版された書物だが、この草稿の検討から、その成立過程の一端が明らかになると思われるので、以下いささか私見を述べてみたい。

『楽翁公伝』の原稿は左表のように綴りが十五冊残っている。

綴の番号	章名	表紙	現行『楽翁公伝』章立て
楽翁公伝一	緒論、第一章生立と教養	なし	緒言、第一章生立と教養
楽翁公伝二	第二章白河松平家を継ぐ	なし	第二章松平家相続
	第三章白河藩治	なし	第三章白河藩治
楽翁公伝四	公の入閣	なし	第四章執政補佐

楽翁公伝五	公の態度	なし	第五章施政の方針
楽翁公伝六	民政	あり	第六章財政
楽翁公伝七	財政	あり	第七章財政整理
楽翁公伝八	風紀の肅正	あり	第八章風紀の肅正
	楽翁公の学政	なし	第九章学政
九	公の尊王	あり	第十章尊王
十	公の外交	なし	第十一章外交
十一	公の外交	なし	第十二章退職
十二	公の退職	あり	第十三章白河藩治(再び)
	第十四章白河藩治(再び)	あり	第十四章文芸
	第十五章文芸	あり	第十五章卒去
※1 十五	第十五章卒去	あり	第十五章卒去

※1「初稿」とあり。※2もと第十四章、「四」を消して十五章とする。

『楽翁公伝』は昭和十二年に洪沢栄一を著者として岩波書店から出版されたが、その複雑な成立過程は、昭和六年に口述筆記された洪沢の自序によれば、大略つぎのようであった。まず、「数年前」に洪沢が楽翁公の伝記編纂を松平子爵に諮り、了解をえたので三上参次に懇談したら、三上は公の伝記を著そうとして資料を蒐集し「稿本を作製して」いたが、明治天皇紀撰述に従事しているためかなわず、「蒐集した資料と稿本とを挙げて提供する故、他に適當なる学者を選んで」編纂せしむることとし、平泉にそれを託した。一通り草稿は出来たが、平泉の欧州留学のことがあり、さらに中村孝也に委託、中村が修訂し、さらに三上が校閲、洪沢も熟読して、松平稲吉にも精読を請い、その注意を受けて訂正してようやく完成したという。つまり「三上博士が資料と第一稿本とを提供して、平泉博士これを編纂し、中村博士の修

訂」したもののなのである。この自序の奥にある渋沢敬三の文によれば、中村の修訂した稿本が渋沢栄一のもとに送られてきたのは昭和六年の七、八月の交であったという。なお、平泉自選の『寒林年譜』には、「大正十四年九月十六日初めて渋沢青淵子爵にあひ、その委嘱により楽翁公伝編纂に着手す」とみえる。

いま「平泉文書」に残っている原稿は、そのうちの平泉が編纂した草稿である。この草稿と現行の『楽翁公伝』を比較してみると、草稿は口語体で記されているのたいして、現行本は文語調であって、まずその文体が大きく異なっている。また、草稿では冒頭部分に「楽翁公」の伝記と題した理由などが記されているが現行本にはなく、それ以外でも草稿にはない記述がみられる。ただし、史料引用も多くは草稿を踏まえており、おおむね草稿の口語体を文語調に改めたのが現行本だといえるのである。

それでは、「平泉文書」に残っている草稿は、十五冊すべてが同じ時期のもので、一括して「自序」にいう一通り出来た草稿とみなせるだろうか。それには若干問題がある。

現行『楽翁公伝』は、緒言と第一章から第十五章までで構成されている。これは一見草稿の緒論と十五の章に対応するようにみえる。だが、現行本では第十三章と第十四章に相当する「白河藩治（再び）」と「文芸」をおのおの第十四章と第十五章と題しているのはたんなるミスとは思われない。また「第十五章卒去」についても第十四章の四を五と訂正しているのは意味がありそうである。さらに「白河藩治（再び）」と「文芸」をおのおの第十四章と第十五章とすれば、「卒去」を第十五章ないし第十四章とするのは重複することとなり、不自然である。このように考えれば、「白河藩治（再び）」と「文芸」の原

稿と「卒去」の原稿は、一括して扱えないものではないかと推測される。そして「卒去」の原稿に「初稿」と記されていることを考え合わせると、「平泉文書」に残っている草稿にはじつは新旧の別があり、「卒去」はそのうちの旧、すなわち初稿であり、「白河藩治（再び）」と「文芸」はそれより新しい段階の原稿つまり第二稿ではなからうか。章が食い違うのは、その間に章立てに変更がなされたからと考えられる。

そのように想定して、この草稿群をみれば、他にも新旧の別がうかがえる例を見いだすことができる。すなわち「公の入閣」の原稿の三十八〜四十頁の元原稿に相当する原稿がaとbと記されて二枚残っており、「公の入閣」の綴りはすくなくとも第二稿であったことが判明するのである。ここから、「公の入閣」の元原稿a・bと「卒去」は旧い草稿（初稿）であり、他は新しい原稿（第二稿）である可能性が出てきたのである。

では、「卒去」の章が第十四章を十五章と訂正しているのはなぜであろうか。それを解く鍵は、平泉が三上参次の稿本と資料に基づいて『楽翁公伝』を執筆したということである。その三上の稿本の構成を推測させるのが、第三章の草稿二十一頁に付されている「（原著第三章「藩主としての定信」は老中辞職後の事なり。あとへ廻すべし）」というコメントである。ここでいう「原著」とは三上の稿本のことであろう。本来それには第三章に老中辞職後の白河藩主としての定信の事蹟が記されていたのであって、平泉はそれをあとに廻して、新たに「白河藩治（再び）」の章を立てたと思われる。したがって、三上の稿本は平泉の草稿よりも一章分少なくて全十四章であったと思われる。「卒去」の章がはじめ第十四章となっていたのは、三上稿本に従った

からで、のちに「白河藩治(再び)」の章を立てた時に表題を第十五章に訂正したと推定されるのである(とすれば、表題をかえただけで初稿をそのまま第二稿として使用したのかも知れない)。

三上稿本の内容を推測するのは困難だが、それを推測させる事例が一つだけある。平泉の草稿の第一綴に定信の絵画について「今日、松平家に残ってゐるのは、関羽と鉄拐、蘇武の三幅であるが、関羽の如きは長六尺、幅四尺余の大幅に緻密なる色彩を施したるものであつて、見事な大作である」と述べ、欄外に「写真を入れたし」と記しているところが、これに対して別筆で「この画はなし。画としては、子爵家に(1)花鳥の図(史学雜誌)(2)寒山拾得、山桃、日蓮等あり。

(1)か(2)よろし」というコメントが付されていて、実際は関羽・鉄拐・蘇武の三幅は現存してないらしい⁽⁶⁾。にもかかわらず平泉が見てきたような記述をしているのは、この文章が彼のオリジナルなものではなく、既成の原稿をアレンジして記したことを暗示している。

その元原稿こそ三上稿本であつたと思われる。僅か一例しかないが、ここから三上の稿本がかなり完成されたものであつたことがいえるのではなからうか。もしそうとすれば、三上稿本と平泉のオリジナルを弁別することは、この原稿からはほとんど不可能ということになる。

なお、平泉の原稿には、「ノートに八月下旬とありき」(第二章、四頁)や「江都聞見集(ノートに江戸見学録とあるは即ちこれか)」(四綴、二十頁)、「コノ処ノート妙ナリ」(七綴、二頁)など、ノートという語句が見え、執筆に際してノートを参照したことがわかる。このノートと三上稿本との関係が問題だが、三上が平泉に託したのが「資料と稿本」の二種だったことを考え合わせると、資料に相当するのがノートであつたのかも知れない。

ところで平泉の希望に対して別筆でコメントしているのはおそらく三上であろう。平泉は三上の稿本とノートにしたがつて原稿を作成し、それに疑問点や私見、希望を書き込んで三上に渡し、三上はそれを閲覽してコメントを記入していたと推定され、『楽翁公伝』執筆に平泉と三上との共同作業という性格があつたことがうかがえるのである。

ところで初稿以外の第二稿にもさらに新旧の別があるように思われる。現存の草稿では現行本が第十三章として「白河藩治(再び)」を第十四章に、第十四章として「文芸」を第十五章にしており、一章ずれている。とすれば、その前に一章余分になればならないが、草稿は表題は異なっているものの現行本と対応関係にあるものばかりで、余分な章は見当たらない。この疑問をとくのが、草稿群のなかに混じつて残されていた平泉自筆のメモである。執筆年次は不明だが、『楽翁公伝』成立について重要な史料と思われるので左に掲げる。

(一) 原稿進捗の経過報告

第一章より第十三章まで完成、すべて四百二枚。残りは第十四章(再び白河藩治)、第十五章文芸、第十六章卒去。

以上併せて五六十枚の見込。

(二) 日光調査の報告

(三) 日光行について助手一名(臨時のもの)(カッコ内割注、引用者) 旅費請求の件(この項目全部抹消、引用者)

(四) 写真撮影の事

(五) 桑名探訪の事

このメモから、『楽翁公伝』の原稿はまず第十三章まで完成していたことがわかるが、ここで残りを「第十四章(再び白河藩治)、第十

五章文芸、第十六章卒去」と記しているのは、さきほどみた現行本と一章づつずれた表題と合致する。さらにここで注目すべきが、すでに完成した原稿を「第一章より第十三章」と記していることである。現行本では冒頭にくるのは緒言で、残っている草稿にも緒論とあるが、このメモでは第一章が冒頭にあたることとなる。つまり、平泉はある時点で緒論を第一章に改め、全部で十六章の章立てとしたのである。現存している「第十四章白河藩治（再び）」と「第十五章文芸」は、後で述べるように完成度が高く、第十三章までの完成のあと書き継がれた原稿であったと推測できよう。

さらにこのメモでは、「白河藩治（再び）」の前の章までは完成したとなつている。このことと現存草稿が緒論と第一章を分けていることを考え合わせると、先にみた新しい原稿のなかでも、「緒論」→「公の退職」と「第十四章白河藩治（再び）」・「第十五章文芸」は分けて考えるべきであろう。とくに第十四章と第十五章は、他の原稿と比べてインクやページ番号の記載場所も違っており、訂正・書き込みもあまりなく、筆跡も別人のようで、わずかな書き入れが平泉の筆跡と思われる。おそらく、平泉の草案を誰かが清書し、さらに平泉が訂正を加えたものであろう。

このように考えると、現存の『楽翁公伝』の草稿にはつぎの三種が混在していると思われる。

- ①初稿 「公の入閣」の元原稿 a・b と「第十五章卒去」
 - ②第二稿 「緒論」から「公の退職」まで
 - ③第三稿 「第十四章白河藩治（再び）」と「第十五章文芸」
- ここから『楽翁公伝』の編纂過程が幾分想定できるように思われる。まず、全十四章からなる三上の稿本にしたがって初稿が書かれ、つい

で新たに「白河藩治（再び）」を独立させた第二稿が作成され（その時「第十四章卒去」が第十五章に改められたらしい）、三上の指示を仰いだ。その後「緒論」を第一章と改めて第三稿が執筆され、十三章まで完成して提出された⁽⁷⁾（現存のメモはその時のもの）。ついで執筆された「第十四章白河藩治（再び）」と「第十五章文芸」は若干の訂正があるため提出されなかった。

以上、「平泉文書」に残る『楽翁公伝』草稿について、若干の考察をおこなった。草稿に三種あるとして、なぜ各章一種づつしか残っていないのか、検討すべき問題は残っている。『楽翁公伝』編纂の実際については、本草稿だけで論じるには限界がある。それ以外の場所、たとえば三上参次や中村孝也、渋沢栄一らの旧蔵品のなかに関係する資料があるかも知れないが、今後の探究に待たなければならぬ。本稿では一応、「平泉文書」に残る『楽翁公伝』草稿から得られた仮説を提示するにとどめたい。

四 『校訂 關邪小言』の演習

昭和六年の欧米からの帰国後、平泉澄が学内の講義・演習で国粹主義的思想を鼓吹したことはしばしば指摘されてきた。ただ、その内容については一部がエピソード的に語られるだけで詳しいことは明らかになっていない⁽⁸⁾。そのなかで、「平泉文書」に残されている平泉の手沢本『校訂 關邪小言』（昭和十三年八月四日発行）は、その書き込みからみて演習教材として使用されたと考えられ、彼の演習内容を考える上で貴重な資料である。

『關邪小言』は幕末の攘夷論者大橋訥庵（一八一六～六二）の著作

である。校訂者の寺田剛は、昭和八年に東大文学部東洋史学科に入学、十一年に卒業して神道研究室助手（のち助手）となり、十四年から満州建国大学に赴任した平泉門下生で、昭和十一年に『大橋訥庵先生伝』を刊行。その時に蒐集した著作・遺文を編纂して、十三年に『大橋訥庵先生全集』上巻を刊行した。同書の「刊行の由来」によれば、平泉が訥庵の遺稿出版を企図し、寺田は「命を奉じて（略）編纂に従」い、宇都宮の菊池次郎の援助を得て出版に至ったという。「關邪小言」はその全集上巻に収められており、『校訂 關邪小言』はそれを単独で刊行したものである。全集はその後、寺田の満州赴任もあつたが、中巻を十四年、下巻を十八年に刊行して完結した。

平泉が「關邪小言」を用いて日本思想史の演習をおこなっていたことは、昭和十七年十月入学の斎藤正一や田中卓氏が述べているが、そのテキストが『校訂 關邪小言』だったのである。昭和十三年度から平泉は東大文学部で日本思想史講座も担当して、講義と演習をおこなうようになった。「關邪小言」を収めた『大橋訥庵先生全集』上巻はその年に刊行されているわけだが、同時にそのなから「關邪小言」を別に刊行したのは、あるいは演習テキストとしての使用をも考えてのことかも知れない。

つぎに同書の書き込みから平泉の日本思想史演習について若干検討してみたい。まず、四ページ六行目上欄外に「昭和十三、十、二十講了」、五ページ六行目下欄外に「十四、十、十二」、八ページ九行目下に「昭和十八、三月十八日」、十六ページ十三行目下に「昭和十五年十二月 ここに終る」、二十五ページ十四行目下に「13年終」という書き込みがある。これらは演習の進度を示すもので、平泉がこの本を用いた演習を、昭和十三年度後半、十四年度後半、十五年度後半にお

こなっていたことがわかる。十六年と十七年の書き込みがないが、十六年度については、一学年は『初山踏』から『關邪小言』の演習であつたらしい。¹⁰十七年の演習も『初山踏』が使われたが、その年は九月に卒業が繰り上がり十月に新入生が入学して一学年は半年で終わったから、『關邪小言』まで進まなかつたのかも知れない。ついで十七年十月入学の田中氏によれば、その年度の前半は『初山踏』、後半が『關邪小言』で、十八年七月一日で終わったという。¹¹本書にある昭和十八年三月十八日の書き込みはその時のものである。十八年十月の入学生は、本書に「昭和十八年十月入学生連名簿」が挟んであつたので、本書をテキストにした演習を受けたようだが、その年十二月の学徒出陣で在学期間は実質二ヵ月しかなく詳細はわからない。

このようにみえてくると、昭和十七年については不明だが、日本思想史の演習は例年、前半は『初山踏』、後半は『關邪小言』であつた可能性が高い。本書のなかの書き入れで「之によれば大橋先生は支那の学問を標榜して西洋思想をうつ也。本居先生は専ら我国の古意を以て漢意を斥くる也」と、訥庵と宣長とを比較しているのは、前半に宣長の『初山踏』を取り上げているからであらう。

ところで、『初山踏』には国史学の入門書という意味があるが、『關邪小言』を演習に取り上げたのはいかなる意味があつたのだろうか。『關邪小言』はペリー来航の直前に書かれた西洋思想排撃の書物である。平泉はテキストとした『校訂 關邪小言』の扉裏に「洋学の興隆」と題して、江戸時代の洋学を四項目にまとめて概観している。

これは、演習の冒頭で、大橋訥庵がこの著作をなした背景を説明するための覚書と推察されるが（平泉が傍線を付した『關邪小言』巻一総論の冒頭「西洋ノ学ト云モノ盛ニ天下ニ行ハレテ」についての説明と

もいえる)、平泉はこの演習を、洋学の興隆に対抗した国粹思想からの批判といった文化的な観点からおこなったものではおそらくなかった。これは彼の大橋訥庵や『關邪小言』への評価から推測できることである。

平泉は自ら『大橋訥庵先生伝』に寄せた序で「予は夙に先生卓礫の風彩を慕ひ、屢々之について講ずる所あつた」と記すように、大橋訥庵にはやくから注目しており、左のように昭和九年以降何度か青々塾などでの先哲遺文講義にその著作を取り上げている。

送肝付毅脚序 昭和9年3月16日(以下同じ)、10・5・14、12・2・12、13・5・3、14・6・3、16・6・1、

17・5・12、19・10・29

陳龍川文鈔序 9・6・16

読赤穂義士録 9・10・6

關邪小言序 10・4・19、12・9・25、14・12・3、17・6・19

元寇紀略序 12・10・29、15・6・23、18・10・17

陳龍川文鈔序 14・10・24

地球図説・送向井子保婦長崎序 16・1・26。

書元寇紀略後 16・2・9。

赤穂義士裏書跋 16・2・13、18・6・9

寺田が『大橋訥庵先生伝』を執筆したのも、その緒言によれば「先年恩師平泉澄先生よりその偉大なることを承り、始めて研究を思い立」ったからである。それがこれらの講義かどうかは確言できないが、その可能性は高からう。この際、平泉が最も多く取り上げているのが、『送肝付毅脚序』である。平泉は自ら編集した『日本学叢書』第十卷

「志士遺文集」(雄山閣、一九三九年)に訥庵の「継述舎説」と「送肝付毅脚序」を収録し、「前者は以て伝統を考へ、敬を考ふべく、後者は以て東洋政治学の根本を見るべく、今日一般に伝統を無視して徒に己の独創を誇り、また己の魂の修練を忘れて天下の政治を云々するの弊に対し、反省の機を与へ、匡救の縁となるものであります」という。このように、平泉にとって大橋訥庵は単なる幕末の一思想家ではなく、先哲すなわち先生なのであって、その著作は現代人に「反省の機を与へ、匡救の縁となるもの」なのである。とすれば、当然、それを題材とする思想史演習も、単に過去の思想を研究することに止まるはずはなからう。

平泉は『日本学叢書』第十卷の解説で「關邪小言」について、「人往々にして之を頑迷固陋の見といたしますが、当時滔々として入り来り漸く天下に流行せんとする西洋の思想に対して、厳しく之を批判せられたものであり、ペルリ来航以前に既に此の批判を必要として執筆せられた事の、先見の明驚嘆に値するばかりでなく、その西洋思想の根本を衝いて居られる点は、今日と雖も敬服すべき卓見が甚だ多いのであります」と述べている。平泉は訥庵の思想を述べながら、この演習を通して「西洋思想の根本を衝いて居る」今日と雖も敬服すべき卓見」を学生に示そうとしたと思われる。その点を「校訂 關邪小言」に残された彼の書き込みからみてみたい。

『關邪小言』は卷一「総論」、卷二「論西洋不知活機」、卷四「或問」からなり、卷三「論西洋不知仁義、論西洋不知活機」、卷四「或問」からなり、総じて西洋思想を排撃する攘夷論である。そのうち書き込みや傍線などがあるのは、卷二以外の各巻でとくに卷一と卷三に多い。これは平泉が卷二以外の諸巻を教材として使用しようとしていた

ことを示すと思われる。⁽¹³⁾ただ、演習の進度を示す書き込みからみて、実際は巻一の途中で演習は終了していたらしく、傍線を付した諸巻がみな教授されたわけではなさそうである。そこから、これらの書き込みや傍線は平泉の個人的なもので直接演習とは関係がないという推測もなされようが、一二頁上欄外に「コノ一条、避クベシ」と書かれているのは、教材として相応しくないという判断であろうから、やはり本書の書き込みや傍線は演習を念頭においたものであったと思われる。

平泉が傍線や圏点を付して強調したのは、たとえばつぎのようなフレーズであった。

然ラバ此後ニ至テハ、国体モ西洋ノ如クナラデハ誠ノ国体ニ非ズト思フベク、朝廷ノ紀綱制度モ西洋ノ如ク改メザレバ、的当ナラズト思フニ至ラン。(十六頁)

一タビ洋学ニ入りタル者ハ、必西洋鼯鼠ニナリテ、絶エテ国体ノ異ナル所以ヲ弁ゼズ何モカモ西洋ノ如クニナセザレバ、是ナラヌコトト思ヘルサマナリ。(二十六頁)

これは、「外国崇拜の余り、人心が遂に国体の変革を企てるに到るであらう」という訥庵の憂慮を示すもので、寺田剛は「或は自由民権と云ひ、或は民主主義と云ひ、更には共產主義と云ひ、幾多の邪説の横行に委ねられた明治大正昭和六十年の踏み来つた跡を顧る時、先生の此の語は吾人の心に無限の呵責を与へる」という。⁽¹⁵⁾おそらく、平泉の問題関心も同様のものであったろう。

平泉はまた冒頭の一節、

近世ハ西洋ノ学ト云モノ盛ニ天下ニ行ハレテ、人ノ貴賤トナク、地ノ都鄙トナク、拂郎察ノ、英吉利ノ、魯西亞ノ、共和政治ノト

言ヒ噪ハギテ、我モ我モト其学ヲ治メ、競フテ戎狄ノ説ヲ張皇スルハ、聖道ノ為メニモ、天下ノ為ニモ、慧孛ニマサレルノ妖薬ト云フベシ(二頁)

の「西洋ノ学ト云モノ盛ニ天下ニ行ハレテ」に傍線を付し、さらに「共和政治」に圏点を打って「安井息軒 参照P 16 P 26」と書き入れている。参照頁は先に引用したフリーズが該当するが、安井息軒とはその「与某生論共和政事書」を指すのではないかと思われる。この文章は平泉が青々塾などでの先哲遺文講義にも用いていたもので、そのあたりに演習内容を広げていったのかも知れない。

また彼が、

西洋ノ者ドモガ天地ノ間ノ大道ハ刺螫ニテ立ツト言ヘルヲ以テ其根本ノ不仁ヲ見ルベシ。刺螫トハ世俗ノ語ニ意気地ヲ張合ト称スル類ニテ(一〇七頁)

に傍線を付して、その欄外に「生存競争の説 政治学説、政治とは力也、支配也、力と力の争也、バランス也とす、階級闘争」と記したり、さらに「洋画又は西洋彫刻の残忍なる題材」として「例へば Dresden の絵画館報二十六号にのする猪狩の図 Die Wildschweinsjagd の如きそれ也。くわしくは Note p. 57-58 参照」と記すのは、平泉のいう訥庵が「西洋思想の根本を衝いて居られる点」に当たるのである。そして彼は「和シテ一体、一味トナリテ」に傍線を付して、欄外に「独伊の全体主義、日本は一体」と書き記し、訥庵の思想を述べながら西欧とは異なつた日本の「優秀性」を指摘するのも忘れないのである。

わずかな事例しかあげられなかったが、それによつても、平泉の日本思想史演習が西洋思想を排斥するかなり教化的な内容をもつたものであったことは推測できるのではないかと思う。

おわりに

以上で東京大学文学部日本史学研究室に保管されていた「平泉澄氏文書」についてのつたない観察を終えたい。文中に散乱する憶測や誤謬に対する御叱正を乞うことは勿論であるが、とくに、当時の事情をご存じの方々から御批判、御教示が頂ければ幸いである。

最後に「平泉澄氏文書」の調査を許可していただいた東京大学文学部日本史学研究室の関係各位、とくに何かと便宜を図ってくださいった佐藤全敏氏、本報告の公表にお力添えをいただいた佐藤信氏、そして「平泉澄氏文書」の調査結果の公表を快諾していただいた平泉隆房氏に衷心より感謝の意を捧げる次第である。

註

- (1) 「平泉澄氏文書」については、大隅和雄氏に「研究室にはまだ氏のカードや図書があり、私達の使っていた茶碗の中には平泉氏の湯呑みであったと伝える有田の茶碗もあった」という記述がある〔日本の歴史学における「学」〕〔中世思想史への構想〕名著刊行会、一九七四年)。また平泉自身も、一九四五年八月一七日に平泉が戸田貞三文学部長に辞表を提出した際、私物の書籍が研究室に残っているが、持ち帰る手段がないので、適当な時節まで大学に置く事を許されたいと願ひ、戸田が「研究室の書物は、いつまでもおあづかりしますから、ご心配なく」と答えたという(平泉澄『悲劇縦走』皇学館大学出版部、一九八〇年)。
- (2) C類のなかには「寄贈 大正十四年十二月四日 黒板勝美氏」

の印をもつものが何冊かある。平泉によれば、彼が講師になった時に国史研究室を創始したいと願ひ出、その際黒板が書物を大量に寄付してくれたという(平泉澄、注(1) 著書)。

(3) 「先哲遺文講義の一覧」(田中卓『平泉史学と皇国史観』田中卓評論集第二巻、青々企画、一九九九年)。

(4) 拙稿「平泉澄における人間形成」(『政治経済史学』三九七、一九九九年)。

(5) 平泉澄、注(1) 著書、五一―八頁。

(6) この三幅については現行『楽翁公伝』では「殊に永く家に伝ふべき旨を特命し置かれたりといふ蘓武・鉄拐・関羽の三幅の、明治維新の混乱によりてその所在を失したるは、最も遺憾とする所なり」という記述となっている(一七頁)。

(7) したがって、「平泉文書」中の草稿と現行『楽翁公伝』との異動も、第二稿段階のものについては、それが第二稿から第三稿の間に生じたものか、中村孝也の修訂の際に生じたものかは断定できないことになる。ただ第三稿である「白河藩治(再び)」と「文芸」については、現行本との相違(頼山陽との関係などの記述)は中村孝也による加筆の可能性が高いと思う。

(8) 近年、『芸林』誌上で日本思想史講義のノートが公開されており、東大内部での平泉の教育を知る上できわめて重要な資料を提供している。

(9) 斎藤正一『庄内藩』(日本歴史叢書、吉川弘文館、一九九〇年)、田中卓「平泉史学における“豚”と“百姓”」(『平泉史学と皇国史観』前掲)。

(10) 西沢久宣氏の私信から類推した。

- (11) 永原慶二『皇国史観』（岩波ブックレット20、一九八三年）。
- (12) 田中卓、注（8）論文。
- (13) 卷二は内容が儒教的な自然観にかかわるので、さすがに「今日と雖も敬服すべき卓見」として紹介することはできなかったのであらうか。
- (14) オランダ人の妻が夫を慕って港に至り衆人の中で抱擁したという「禽獸ノ白昼ニ尾スル者ト全然異ナルコトナキ」醜態を述べた部分であるが、この一条を避けようとしたのには、平泉の潔癖性がうかがえるかも知れない。
- (15) 寺田剛『大橋訥庵先生伝』（至文堂、一九三六年）。

付表 「平泉澄氏文書」目録（稿）

（一）戦前の資料

1 書籍

- ① 著者 ② 発行機関 ③ 発行年月日 ④ 蔵書印等所蔵を示すもの
⑤ 備考

A類とB類については、単行本・雑誌等に分類し、原則として配列は便宜上発行年月日の順にしたがった。C類については所蔵機関別に分類し、ラベル番号のあるものはその順にしたがい、その他は主として発行年月日で配列した。なお資料名の後のカッコ内の数字は先に日本史学研究室で添付されたラベルに記された番号（本文では整理番号と記した）である。

A 平泉文書A類

▼単行本

- 1 塩竈神社史料（213―4）
- ① 山下三次 ② 国幣中社志波彦神社・塩竈神社社務所 ③ 昭和2・4・28 ④ 「平泉博士殿／国幣中社志波彦神社・塩竈神社宮司 山下三次」の札
- 2 鼎軒田口卯吉全集 第一卷（226）
- ① 鼎軒田口卯吉全集刊行会（代表田口文太） ③ 昭和3・1・10
- 3 鼎軒田口卯吉全集 第三卷（226―3）
- ① 鼎軒田口卯吉全集刊行会（代表田口文太） ③ 昭和3・4・5
- 4 鼎軒田口卯吉全集 第四卷（226―4）
- ① 鼎軒田口卯吉全集刊行会（代表田口文太） ③ 昭和3・4・5
- 5 鼎軒田口卯吉全集 第七卷（226―7）
- ① 鼎軒田口卯吉全集刊行会（代表田口文太） ③ 昭和2・9・20
- 6 鼎軒田口卯吉全集 第八卷（226―8）
- ① 鼎軒田口卯吉全集刊行会（代表田口文太） ③ 昭和4・7・28
- 7 江都督納言願文集（223―1）
- ① 平泉澄 ② 至文堂 ③ 昭和4・10・28 ⑤ 他に2冊あり。
- 8 後法興院記 上下
- ① 平泉澄 ② 至文堂 ③ 昭和5・9・1 ⑤ 「やけてかまはぬもの 平泉」として包めり。
- 9 後法興院記 下巻（25―2）
- ① 平泉澄 ② 至文堂 ③ 昭和5・9・1
- 10 後法興院記（七）（222―4）
- ⑤ 抜刷。文明十四年記。
- 11 後法興院記（十）（24―8 1）
- ⑤ 抜刷。文明十七年二月以後。あと二冊あり（206―6、206―9）。
- 12 後法興院記（十一）（222―5）
- ⑤ 抜刷。文明十八年記。計七冊あり（うち二冊は24―8―2）。
- 13 箱根神社大系上巻（242―1）
- ① 箱根神社社務所 ② 箱根神社社務所 ③ 昭和5・11・25
- ④ 「謹呈／平泉先生／小林健三」 ⑤ 箱の内側に「本郷」とあり。

- 14 吉野朝時代に於ける讃岐の一大勤王事蹟 附長町家系の疑問を
解く鍵（『讃岐郷土叢書』第五編）（25―11）
- ①堀正二 ②讃岐郷土研究会 ③昭和8・12・29
- ④「平泉（花押）／昭和九年十月二日／香川県大川郡津田町／長
町與彦氏寄贈」
- 15 柳子新論（218―12）
- ②三秀舎 ⑤奥に「以印刷代謄写／昭和九年秋／青々」
- 16 世界之東郷元帥（233―2）
- ①中村孝也 ②東郷元帥編纂会 ③昭和10・2・28
- 17 Admiral Togo（英文東郷元帥）（233―4）
- ③昭和10・2・28 ⑤233―2と共に括り「平」の札を付す。
- 18 校訂 關邪小言（236―5）
- ①寺田剛 ②至文堂 ③昭和13・8・4 ④「平泉澄（花
押）」 ⑤書き入れあり。あと書き入れなきもの4冊（うち箱
入り2冊）あり。
- 19 伽具土之研究（210―2）
- ①川口興道 ③昭和17・4・1 ④「寄贈 平泉澄様 著
者」
- 20 増補訂正 神代帝都考
- ①扶間畏三 ②扶間延年 ③昭和17・8 ⑤謄写版。平泉
宛末松偕一郎の書簡を挟む。寄贈の旨を記せり。
- 21 大橋訥庵先生全集 下巻（247―13）
- ①平泉澄・寺田剛 ②至文堂 ③昭和18・7・10 ⑤あと
3冊あり。
- 22 大國主命（217―4）

- ①山本三郎 ②湘風会 ③昭和19・3・25 ④「平泉先生
玉案下 著者（印） ⑤『湘風会日本学叢書』第三 非売
品

▼報告書

- 23 沿道ノ史蹟（244―6）
- ①鹿児島県 ③昭和10・11・6 ④「鹿児島市高麗町六二三／
池田俊彦氏寄贈」（平泉の手か）。池田は県立第二鹿児島中学校
校長にして本書の「調査集録」をせし人。
- 24 入学者ニ関スル調査報告 第二号

- ②東京帝国大学庶務課 ③昭和11・6 ④鉛筆書きで「平泉
教授殿」とあり。

▼雑誌抜刷

- 25 寺子屋の意義・語史及起源について（231―22）
- ①石川謙 ④「平泉澄様」、「平泉蔵」印。「巢鴨町染井十一、
石川謙氏寄贈／大正十五年十一月十五日落手」 ⑤『教育論
叢』大正15年9月〜11月の抜刷
- 26 奥羽に於ける交通の発達（217―13）

- ①大島延次郎 ②東北帝国大学文科会 ③昭和11・7
④「謹呈 平泉先生」 ⑤『文化』3―7の抜き刷り

- 27 日支交通と船舶国籍證（55―11）
- ①森克己 ③昭和13・10 ④「平泉先生惠存」 ⑤『交通文
化』四号の抜刷

▼和本

- 28 御公家鑑

- ③享保二年版、享保十一年版、寛保二年（表紙は『万世雲上明鑑

完』とする)

29 万世雲上明鑑 上下

③安永二年版、文政四年版、文政十年版

30 新刊雲上明鑑

③文政十年版

31 雲上明鑑大全 上下

③天保八年版、万延元年版、安政四年版、文久三年版、元治元年

版、慶応元年版、慶応二年版、慶応三年版、慶応四年版

⑤『御公家鑑』、『雲上明鑑大全』は4つの箱に入れて一括し

(212・1〜4)、「平」の付け札あり。いずれも和本。

▼目録

32 往来物分類目録 (242―5)

①岡村金太郎 ②啓明会 ③大正11. 11. 15 ④「平泉

蔵」印

33 第三回郊北文学会展観目録 (225―4)

⑤昭和8. 11付けの平泉宛の案内状を挟む。

B 平泉文書B類

▼単行本

34 熊本市・飽託郡誌 (217―11)

①角田政治 ②飽託郡私立教育会 ③明治39. 10. 10

35 勤王開国の先唱者 溝口健齋公 (231―1)

①梅田又次郎 ②民友社 ③明治40. 7. 25

36 今上詔勅集

①福田滋次郎 ②晴光館書店 ③明治43. 10. 25 ④「15.

10・29/今上詔勅集」のラベル ⑤「平泉氏カード」第3箱
中にあり。

37 楽翁公五十賀水詞 (225―2)

③大正4か。

38 甲斐の絶勝 御嶽風景写真帖 (222―29)

②宮井商会出版部 ③大正6. 11. 20

39 身延山写真帖 (222―31)

①畑野荒吉 ②畑野荒吉 ③大正6. 5. 27

40 金沢市要覧 (222―25)

②金沢市役所 ③大正8. 10. 1

41 諏訪神社の研究 (231―10)

①八代国治 ⑤抜刷。「大正九年十二月稿」とあり。

42 温泉嶽を繞りて (231―13)

①杉村広太郎 ②温泉公園發展会 ③大正13. 4. 16

43 河野磐州伝 上巻 (231―7)

①河野磐州伝編纂会 ②河野磐州伝刊行会 ③大正13. 5.

5 (再版) ⑤初版は大正12. 11. 20

44 瓊子内親王 (217―3)

①時山久蔵・勇・美則 ③大正14. 12. 25

45 富士嶽案内 (222―26)

②山梨県 ③大正15. 9

46 元寇文永役殉難者六百五十年祭記事

②元寇文永役殉難者六百五十年祭事務所 ③大正15. 10. 31

47 大隈公八十五年史 第二卷 (242―6―1)

①大隈公八十五年史編纂会 ②大隈公八十五年史編纂会

- ③大正15・12・8
- 48 大隈公八十五年史 第三卷(242—6—2)
 ①大隈公八十五年史編纂会 ②大隈公八十五年史編纂会
 ③大正15・11・15
- 49 碩水先生余稿 上(244—11—1)
 ①岡次郎 ②谷門精舎 ③昭和4・8・5
 碩水先生余稿 下(244—11—2)
- 50 岡次郎 ②谷門精舎 ③昭和4・8・5
 ①岡次郎 ②谷門精舎 ③昭和4・8・5
- 51 弘前藩小史と贈位者考(242—4)
 ①森林助 ②弘前図書館 ③昭和4・11・3 ④表紙に「贈呈」とあり。
- 52 菅公の誠心(222—18)
 ①山田新一郎 ②官幣中社北野神社社務所 ③昭和6・10・24
- 53 尋常小学校国史教材観の新研究 下巻(242—3)
 ①全国同人 国史教育研究会 ②全国同人 国史教育研究会
 ③昭和7・6・20
- 54 昭和六年の国史学界(216—3)
 ①代々木会 ②筑波研究部 ④「進呈」の箋あり。
- 55 指定史蹟 城輪柵趾(225—3)
 ①上田三平 ②城輪柵趾保存会 ③昭和7・7・31
 大智禪師(217—17)
- 56 村上素道 ②皓台寺 ③昭和7・9・30 ④「八」のラベル ⑤書き入れあり。
- 57 矢野玄道(愛媛県先哲偉人叢書 第一卷)
- 58 二宮敬作・三瀬諸淵(愛媛県先哲偉人叢書 第二卷)(210—1)
 ①矢野太郎 ②松山堂書店 ③昭和8・6・30
- 59 宗教民族学(人類学叢書 第六輯)(213—5)
 ①宇野円空 ②岡書院 ③昭和9・5・10(第三版)
 ⑤初版は昭和4・12・10
- 60 日光叢書 第五卷 御番所日記 五(213—1—1)
 ①別格官幣社 東照宮社務所 ②別格官幣社 東照宮社務所
 ③昭和9・9・1
- 61 日光叢書 第六卷 御番所日記 六(214—1—1)
 ①別格官幣社 東照宮社務所 ②別格官幣社 東照宮社務所
 ③昭和10・11・1
- 62 日光叢書 第七卷 御番所日記 七(214—1—2)
 ①別格官幣社 東照宮社務所 ②別格官幣社 東照宮社務所
 ③昭和11・11・1
- 63 日光叢書 第八卷 御番所日記 八(214—1—2)
 ①別格官幣社 東照宮社務所 ②別格官幣社 東照宮社務所
 ③昭和13・6・1
- 64 楠公余薫(217—1)
 ①佐賀楠公会 ②木下泰山堂 ③昭和10・5・25 ④「贈呈大楠公六百年記念／皇紀二千五百九十五年／昭和十年五月二十五日／佐賀楠公会」の札、「佐賀楠神社小誌」のリーフレットを挟む。 ⑤72ページに「帝国教育」645の平泉の論文の概要を載せる。

- 65 国史科研究録 (225—10)
- ①茨城県初等教育聯合研究会 ②茨城県初等教育聯合研究会
③昭和10・10・28
- 66 小野梓伝 (247—16)
- ①西村貞次 ②富山房 ③昭和10・11・20 ④「謹呈 坂本嘉治馬」の札あり。坂本は富山房の社長なり。⑤「昭和十年十一月二十三日 小野梓先生胸像除幕式記念」の絵葉書2葉を挟む。
- 67 心学精粹 (日本精神叢書 十二) (247—6)
- ①石川謙 ②文部省思想局 ③昭和9・12・26
- 68 神楽・神歌 (日本精神叢書 四) (247—5)
- ①志田延義 ②文部省思想局 ③昭和10・1・22
贈正一位橘朝臣正成公伝 (238—3)
- 69 中村孝也 ②大楠公六百年大祭奉賛会 ③昭和10・7・5
- 70 義公遺蹟 太田西山の光
①太田尋常高等小学校国史研究部 ③昭和10・7・20 ⑤膳
写版
- 71 水利経済と水利行政 (217—19)
- ①野間海造 ⑤『日本農業の展望』の抜刷。昭和10・4・7
農業経済学会での講演
- 72 思想問題と母の行愛 (国民精神文化類輯 第十二輯) (231—8)
- ①山本勝市 ②国民精神文化研究所 ③昭和11・2・24
- 73 武公遺事としてのぶのたね (217—10)
- ①〔水戸学〕精神作興会 ②協文社 ③昭和11・6・25
- 74 ⑤「武公遺事」は青山延于、「しのぶのたね」は谷忠明の著作。
我が国体と教育勅語 (憲法教育資料)
- ①吉田熊次 ②日本文化協会出版部 ③昭和11・7・19
十訓抄と道德思想 (日本精神叢書) (246—4—1)
- 75 藤岡継平 ②日本文化協会出版部 ③昭和11・8・1
- 76 庭園と日本精神 (日本精神叢書) (246—4—2)
- ①龍居松之助 ②日本文化協会出版部 ③昭和11・8・15
- 77 水戸藩に於ける水府流の沿革 (244—1)
- ①荷見守文 ②荷見守文 ③昭和11・10・5 ④「呈上
荷見守文」とあり。
- 78 吉備津彦神社史料 文書篇 (213—2)
- ①国幣小社吉備津彦神社社務所 ②国幣小社吉備津彦神社社務
所 ③昭和11・10・19
- 79 吉備高島宮趾 (217—16)
- ①世良長造 ②吉備高島宮趾顕彰会 ③昭和11・11・10
御巫清直翁伝 (231—9)
- 80 神宮司庁 ②神宮司庁 ③昭和11・11・25
枕書堂遺草 (221—3)
- 81 守中裕幸 ②矢島堅蔵 ③昭和11・12・30 ⑤矢島栄一
の遺稿と知友の回想集 矢島堅蔵による献呈の紙片を挟む。
- 82 日本精神と自然科学 (日本文化叢書) (246—4—5)
- ①紀平正美 ②文部省思想局 ③昭和12・2・23 ⑤昭和
11・11の日本文化教官研究講習会。
- 83 行としての科学 (日本文化叢書) (246—4—5)
- ①橋田邦彦 ②文部省思想局 ③昭和12・2・25 ⑤昭和

11. 11の日本文化教官研究講習会。
 11. 11の日本文化教官研究講習会。
- 84 自然科学の領域(日本文化叢書)(246—4—6)
 ①松井元興 ②文部省思想局 ③昭和12. 2. 28 ⑤昭和
 11. 11の日本文化教官研究講習会。
- 85 伝教・弘法と日本文化(日本精神叢書)(246—4—8)
 ①金子大栄 ②日本文化協会出版部 ③昭和12. 3. 24
- 86 明治天皇の聖徳に就て(日本文化叢書)(246—4—6)
 ①三上参次 ②文部省思想局 ③昭和12. 3. 29 ⑤昭和
 11. 7. の日本文化教官研究講習会での講演。
- 87 自然科学教育の両側面(日本文化叢書)(246—4—7)
 ①田辺元 ②文部省思想局 ③昭和12. 3. 30 ⑤昭和
 11. 11の日本文化教官研究講習会での講演。
- 88 玉山講義(会津先哲遺芳叢刊第一)(217—9)
 ①星野健 ②会津学研究所 ③昭和12. 10. 13 ④「設立
 趣意書」(昭和12. 8. 1付)を挟む。
- 89 芭蕉と俳諧の精神(日本精神叢書)(246—4—9)
 ①志田義秀 ②日本文化協会出版部 ③昭和13. 4. 30
- 90 本尊美翁追憶録(234—1)
 ①山本安之助 ②本尊美翁追憶録編輯刊行会 ③昭和13.
 9. 10 ④「謹呈 本尊美翁追憶録編輯刊行会」の札あり。
 ⑤本尊美は英国人ボンソンビーのこと。
- 91 正保野史(251—7)
 ②米尾成治 ③昭和14. 5. 27 ⑤矢野玄道『正保野史』の
 複製本。
- 92 神武天皇御東征と熊野(231—23)
- ①太地五郎作 ②太地五郎作 ③昭和14. 7. 5 ④「進
 上 和歌山市新通三丁目/太地五郎作」とあるカバーをつける。
- 93 北郷村之概観(225—5)
 ①大野郡北郷尋常・高等小学校 ③昭和14. 11. 3
- 94 松尾多勢子(231—7)
 ①市村威人 ②山村書院 ③昭和15. 6. 5 ④「下伊那
 郡山本村市村威人氏」との書き入れあり。
- 95 波多野鶴吉翁伝(231—12)
 ①村島清 ②郡是製糸株式会社 ③昭和15. 7. 1(第二
 版) ④「郡是工業株式会社教育厚生課之印」あり。
- 96 来島良藏伝 上下(225—1)
 ①妻木忠太 ②妻木忠太 ③昭和15. 11. 5
- 97 関西巡回記(247—24)
 ①永井環 ②三秀舎 ③昭和15. 12. 12
- 98 越中順逆年表(225—12)
 ①飛見文繁 ③紀元2601 ④「乞御一覽」の付箋あり。
- 99 攷事撮要(奎章閣叢書第七)
 ②京城帝国大学文学部 ③昭和16. 2. 28 ④「贈呈 京城
 帝国大学文学部」の紙片あり。
- 100 家庭祭祀(233—3)
 ①神祇院教務局 ③昭和16. 7. 20
- 101 神嘗祭謹解(244—7)
 ①神祇院教務局指導課 ③昭和16. 9. 30
- 102 家族制度と日本法 上(日本法理叢書第十二輯)
 ①井上和夫 ②日本法理研究会 ③昭和17. 8. 16

- ⑤ 「平泉氏カード」第1箱中にあり。
- 103 我が国の国体 (251—10)
- ① 大西友太 ② 大日本雄弁会講談社 ③ 昭和17・9・12
- 104 八坂神社記録 上 (八坂神社叢書第一輯) (216—1)
- ① 官幣大社八坂神社社務所 ② 官幣大社八坂神社社務所
- ③ 昭和17・12・10
- 105 五雄藩皇国精神講義 (225—14)
- ① 船本恒一 ② 山口県吉敷郡国民学校教員会 ③ 昭和17・12・10 ④ 「謹呈」の札あり。
- 106 下妻政泰公顕彰除幕式記念 (236—2)
- ② 大宝史蹟保存会 ③ 昭和19・5・12 ⑤ 「贈正四位下妻政泰公碑文」(平泉澄撰)を収む。
- 107 通略延約弁 附衝口発 (244—12 a)
- ① 三ヶ尻浩 ⑤ 謄写版。251—1, 244—12 bも同本。
- 108 鎌倉札所三十三ヶ所 観音巡リノ栞 (236—6)
- ② 鎌倉町観光課
- ▼雑誌・紀要 (抜刷を含む)
- 109 史学会会員名簿 (48—16)
- ③ 昭和9・12 ⑤ 『史学雑誌』45巻12号付録
- 110 国民精神文化研究 第一年 第三冊 教育勅語煥発以前に於ける小学校修身教授の変遷
- ① 吉田熊次・海後宗臣 ② 日本文化協会出版部 ③ 昭和9・7・18
- 111 国民精神文化研究 第二年 第六冊
- ② 国民精神文化研究所 ③ 昭和10・3・27 ⑤ 内容は小野正
- 康「日本学としての学問教育」
- 112 思想善導の根本策 (217—2)
- ① 田多井四郎治 ③ 昭和11・5 ⑤ 『正義』の抜刷。神代文字についての論。
- 113 史学趣味 一卷一号
- ② 趣味の考古学会 ③ 昭和11・7・17
- 114 史学趣味 一卷二号
- ② 趣味の考古学会 ③ 昭和11・8・17
- 115 史学趣味 一卷四号
- ② 趣味の考古学会 ③ 昭和11・10・9
- 116 史学趣味 一卷五号
- ② 趣味の考古学会 ③ 昭和11・11・10
- 117 史学趣味 二巻七号
- ② 趣味の考古学会 ③ 昭和12・7・10
- 118 奉公 第四二四号
- ② 奉公会 ③ 昭和13・5・11
- 119 愛日 六巻六号
- ② 福岡農士学校愛日書院 ③ 昭和14・6・15 ④ 「贈呈」
- 120 三重教育 五二〇号
- ② 三重県教育会 ③ 昭和16・10・5 ⑤ 平泉澄「御諭旨の発見を喜びて」の講演筆記を収める。
- 121 東京電灯株式会社社報 四七五号
- ③ 昭和17・1・10
- 122 武道公論 四巻一号
- ② 大日本清風会 ③ 昭和17・1・11 ⑤ 平泉澄「足利高氏名

分論」を転載。

- 123 歴史日本 一卷三号(25—9)
② 雄山閣 ③ 昭和17. 9. 1 ⑤ 「南洋の日本」特集
124 武道公論 六卷八号
② 大日本清風会 ③ 昭和19. 10. 11

▼報告

- 125 宮崎県児湯郡西都原古墳調査報告(207—1)
② 宮崎県 ③ 大正4. 5. 31
126 史蹟名勝天然紀念物保存要目解説 地質鉱物の部(207—4 a)
② 内務省 ③ 大正10. 12 ④ 「黒板所蔵」「黒板蔵」の印
⑤ CHOSHEN HOTELの便箋に「八日市野々宮神社所蔵文書」の書き取りあり(207—4 b)。黒板の手ならん。
127 大正十年度調査 史蹟名勝天然紀念物調査報告(207—3)
① 長崎県史蹟名勝天然紀念物調査委員会 ② 長崎県 ③ 大正11. 3. 31
⑤ 「史蹟名勝天然紀念物調査委員会順序」の謄写版冊子を挟む。
128 史蹟名勝天然紀念物保存要目解説 地質鉱物の部(207—2)
② 内務省 ③ 大正11. 8 ⑤ 207—1、4は一括して括れり。
129 東京府史蹟名勝天然紀念物調査報告書 第三冊(55—4)
② 東京府 ③ 大正14. 3. 31
130 栃木県史蹟名勝天然紀念物調査報告 第二輯(225—8)
② 栃木県 ③ 昭和2. 3. 28
131 名勝調査報告 第二輯
② 文部省 ③ 昭和10. 3. 30
132 天然紀念物調査報告 植物之部 第十五輯

② 文部省 ③ 昭和10. 3. 30

- 133 明治天皇聖蹟 史蹟調査報告 第八輯(216—2)
② 文部省 ③ 昭和10. 3. 30
134 天然紀念物調査報告 植物之部 第十六輯
② 文部省 ③ 昭和11. 3. 30
135 昭和十三年度古蹟調査報告
② 朝鮮古蹟研究会 ③ 昭和15. 6 ④ 「贈呈」の札あり。
136 国史館参考施設調査復命書(224—2)
137 維新政府各省市県宣伝会議報告書(222—3)
① 維新政府各省市県宣伝会議秘書処 ② 維新政府行政院宣伝局
③ 中華民國28. 11 ⑤ 華文タイプ。2冊あり。
▼目録・索引

- 138 印刷文化展覧会 歴史的参考陳列目録(48—11)
① 印刷文化展覧会 ② 印刷文化展覧会協賛会 ③ 大正11. 3. 1 ④ 「黒板所蔵」「黒板蔵」の印。
139 恩賜京都博物館美術品目録 絵画之部其三(支那絵画)(222—22)
② 恩賜京都博物館 ③ 大正15. 3. 15
140 第四回史料展覧会出品目録(48—13)
② 長崎県立長崎図書館 ③ 大正6. 6. 1
141 雑誌索引 第二卷(第二十四回)(55—1)
① 下戸前繁松 ② 『雑誌索引』発行所 ③ 昭和7. 6. 22.
⑤ わくをく
142 東京帝国大学和漢図書目録 増加第一 総記及雜載(55—5)
② 東京帝国大学附属図書館 ③ 昭和13

143 東京帝国大学和漢図書目録 増加第一 哲学・宗教・教育(55

— 7)

② 東京帝国大学附属図書館 ③ 昭和13

144 東京帝国大学和漢図書目録 追加第一 歴史・伝記・地理(55

— 10)

② 東京帝国大学附属図書館 ③ 昭和13

145 東京帝国大学和漢図書目録 増加第一 語学・文学・芸術(55

— 6)

② 東京帝国大学附属図書館 ③ 昭和13

146 東京帝国大学洋書目録 増加第一 昭和十、十一年

② 東京帝国大学附属図書館 ③ 昭和13

147 東京帝国大学洋書目録 増加第二 昭和十一、十二年(55

— 2)

② 東京帝国大学附属図書館 ③ 昭和14

148 東京帝国大学洋書目録 増加第三 昭和十三年

② 東京帝国大学附属図書館 ③ 昭和16

▼和本

149 諸国廢城考 上(自卷六至卷二十五)(216—4)

⑤ 写本。

▼洋書

150 Biographie de Son Excellence Iwakoura Tomomi (225—13)

① Leon Van de Polder ② Imprimerie de S. Salabelle YOKO-

HAMA ③ 1885

151 Pre-War Diplomacy The Russo-Japanese Problem

① J. J. Korostovetz ② British Periodical Limited LONDON

③ 1920

152 History of Japan vol. 1 Compiled from the Records of English
East India Company (237—3)

① Peter Praff ② J. L. Thompson & Co. KOBE ③ 1931 ⑤ 原著
は1822年。

153 表題不明(247—25)

⑤ 独文

▼その他

154 二十万分一帝国図 大分(48—10)

② 陸地測量部 ③ 昭和4・3・30

155 東京帝国大学概要 昭和十五年度(225—7)

⑤ リーフレット

C 国史研究室等所蔵本

▼国史研究室図書

156 百済王三松氏系図(47—15)

④ 「東京帝国大学国史研究室図書93」ラベル、「寄贈大正十四年
二月十八日 黑板勝美氏」の印あり。

157 伊勢国司源顕能伝略(47—11)

② 北畠神社 ③ 大正4・1・1 ④ 「東京帝国大学国史研究

室図書94」ラベル、「寄贈大正十四年二月十八日 黑板勝美
氏」の印あり。

158 南浦文之和尚(成實堂叢書第十一編別冊)(47—14)

② 成實堂 ④ 「東京帝国大学国史研究室図書95」ラベル、

「寄贈大正十四年二月十八日 黑板勝美氏」の印あり。

159 義公行実 全(47-9)

- ④「三宅氏藏書」「東京帝国国史研究室図書96」のラベルあり。
- ⑤「義公行実」は安積澹泊著、元禄14年成立。「国書総目録」に写本が東大(二冊)、「水戸義公行実」(二部)とあり。

160 烈公行実(47-10)

- ④「三宅氏藏書」「東京帝国国史研究室図書97」のラベルあり。
- ⑤烈公の絵葉書及び摘録教葉を挟む。「烈公行実」は会沢安の著、文久元年成立。「国書総目録」に版本が東大にあるという。

161 岡田寒泉家譜(47-13)

- ④「三宅氏藏書」「東京帝国国史研究室図書98」ラベルあり。
- ⑤『寛政重修譜』巻326より「岡田氏譜」、斎藤宗志郎稿「岡田寒泉先生二関スル調査資料ノ巻」「岡田寒泉先生二関スル調査資料ノ二」により構成。

162 醍醐寺什宝品目 第一輯之下(47-12)

- ①玉園快心 ②醍醐寺保存会 ③明治29・5・17 ④「東京帝国国史研究室図書128」ラベル、「寄贈大正十四年二月十八日 黒板勝美氏」

163 微雲館蒐粹(47-16)

- ①真伯観善 ②清浄心院 ③大正12・5・20 ④「東京帝国国史研究室図書184」ラベル

164 東大寺南大門及昭和大修理要録(102-18)

- ②東大寺南大門修理工事務所 ③昭和5・4・29 ④「東京帝国国史研究室図書192」ラベル、「寄贈昭和五年六月拾九日 奈良県」「東京帝国国史図書館」印。

165 楓官餘光(48-9)

- ①碓井小三郎 ②報徳会 ③大正12・3・19 ④「東京帝国国史研究室図書196」ラベル、「黒板蔵」「寄贈大正十四年二月十八日 黒板勝美氏」の印。

166 桂公園記(48-5)

- ④「東京帝国国史研究室図書200」ラベル、「黒板蔵」印。
- 167 莊内史料写真帖 第三号 城輪柵特輯(48-7)
- ①大滝徳蔵 ③昭和6・12・5 ④「東京帝国国史研究室図書200」ラベル、「進呈」

168 東京帝室博物館歴史部第一区列品 金石文目録(251-6)

- ②東京帝室博物館 ③大正10・11・10 ④「国史研究室図書271」
- 169 史蹟名勝天然紀念物保存法規(48-18-B)
- ②文部省 ③昭和7・10 ④「東京帝国国史研究室」の印あり。

170 博物館陳列品図鑑 第四輯(47-7)

- ②朝鮮総督府博物館 ④「寄贈 昭和八年参月四日 発行所」「東京帝国国史図書館」印、「国史研究室図書」ラベル

171 史学会会員名簿(48-15-B)

- ②『史学雑誌』四十四卷十二号付録 ④「国史学研究室」の印あり。
- ⑤傍線住所訂正等あり。

172 日本古版地図集成(46-6)

- ④「東京帝国国史研究室図書」のラベルあり。
- 173 Japan und sein Benolner(48-3)
- ①Wilhelm Beine ②Leipzig Germann ③1860年 ④「今

井「東京帝国大学図書館」の印、「国史学 1 洋2」のラベルあり。

174 表題不詳(48—21)

④「国史学 7 194」のラベルあり。 ⑤独文。表紙より160ページ分欠。

▼史学会

175 博物館陳列品図鑑 第三輯(47—6)

②朝鮮総督府博物館 ④「史学会」印 ⑤昭和7年発行か？
相模国府趾推定図(47—17)

①石原瑛 ③昭和9. 1. 5 ④「史学会」印あり。

⑤「相模(大住・余綾)国府趾考」及び「相模国府趾研究」の附図。地図三枚。

177 普成専門学校一覽 昭和十一年度(48—18)

④「史学会」印あり。

178 満洲地方志綜合目録(満洲学叢刊 第二冊)

①植野武雄 ②満鉄・奉天図書館 ③昭和14. 2. 25
④「史学会」印

179 台湾始政と京都(48—19)

①水尾徹雄 ②京都台湾会 ③昭和16. 10. 1 ④「史学会」印
研究室別室6340125」のラベル上に「史学会印」を押す。

180 哲学会会員名簿 昭和十八年十二月一日現在

④「史学会印」

181 史蹟名勝天然紀念物保存法(48—18—G)

②東京府 ④「史学会印」

182 重野先生追頌記念展覧會出品目録(48—20)

②三州倶楽部講演部、薩藩史研究会 ④「史学会」印
183 国民精神文化 第四卷

②国民精神文化研究所 ③昭和13. 5. 11 ④各冊に「史学会」印あり。

⑤一号から四号の合本。

184 国民精神文化 第五卷 上(227—1—4)

②国民精神文化研究所 ③昭和14 ④各冊に「史学会」印あり。製本した扉に「東京帝国大学国史学研究室」印。 ⑤一号から六号の合本。

⑤一号から四号の合本。

185 国民精神文化 第五卷 下

②国民精神文化研究所 ③昭和14 ④各冊に「史学会」印あり。製本した扉に「東京帝国大学国史学研究室」印。 ⑤七号から十二号の合本。

⑤七号から十二号の合本。

186 国民精神文化 第六卷 上

②国民精神文化研究所 ③昭和15 ④各冊に「史学会」印あり。製本した扉に「東京帝国大学国史学研究室」印。 ⑤一号から六号の合本。

⑤一号から六号の合本。

187 国民精神文化 第六卷 下

②国民精神文化研究所 ③昭和15 ④各冊に「史学会」印あり。製本した扉に「東京帝国大学国史学研究室」印。 ⑤七号から十二号の合本。

⑤七号から十二号の合本。

188 国民精神文化 第七卷 昭和十六年

②国民精神文化研究所 ③昭和16 ④各冊に「史学会」印あり。 ⑤一号から十号の合本。

189 国民精神文化 第八卷 昭和十七年

② 国民精神文化研究所 ③ 昭和17 ⑤ 一号から十一号の合本。

表紙を抜いて製本。183～186は雑誌各冊は史学会、合本後は国史学研究室の所蔵となったが如くであるが、一応ここに配す。

▼学生文庫

190 落成記念 第二高等学校(247―9)

③ 大正15・10・8 ④ 「学生文庫」印あり。

191 史学会会員名簿 昭和八年十一月現在(48―15A)

④ 「学生文庫」印あり、「故川喜多太郎君遺贈」 ⑤ 「史学雑誌」四四卷二二号の付録。

192 岡屋関白記(47―8)

④ 「学生文庫」印あり。 ⑤ 写本。近衛兼経の著。『国書総目録』には東大蔵の写本は記載なし。

▼史学研究室別室

193 史蹟名勝天然紀念物保存法規(48―18―A)

③ 「史学研究室別室1―813」のラベル。

194 史蹟名勝天然紀念物保存法規(48―18―C)

② 内務省 ④ 「史学研究室別室1―826」のラベル。

195 史蹟名勝天然紀念物保存法(48―18―F)

④ 「黒板蔵」「黒板所蔵」印の上に「史学研究室別室837」のラベル。パンチ穴二カ所あり。

196 史蹟名勝天然紀念物保存要目略解(48―18―H)

② 埼玉県内務部 ③ 大正10・7・25 ④ 「黒板蔵」印の上に「史学研究室別室834」のラベル。

197 史蹟名勝天然紀念物保存要目解説(48―18―I)

② 佐賀県 ③ 大正11・5・30 ④ 「史学研究室別室1―812」

のラベル。

⑤ 整理番号48―18は一括して「史蹟名勝天然紀念物保存法規 内務省／文部省／府県」と題す。

▼東京帝国大学図書館蔵書

198 文献索引 第一年度合冊(250―9)

① アチック・ミューゼウム ② アチック・ミューゼウム

③ 昭和11・4・1 ④ 「東京帝国大学図書館」印。

199 Monumenta Palaeographica Vindobonensia(52―1―1)

② Karl. W. Hirsennann LEIPZIG ③ 1910年 ④ 「東京帝国大学図書館」の印あり。

200 Monumenta Palaeographica Vindobonensia(52―1―2)

④ 「東京帝国大学図書館」の印あり。

201 五万分の一地形図 甲府四号 山中湖(48―6)

② 陸地測量部 ③ 明治32・2・28 ④ 「海軍図書之印」「東京帝国大学附属図書館 大正三年五月十日」

▼その他

202 筑紫史壇 第一集～第六十一集

② 筑紫史壇 ③ 大正4・2・20～昭和9・4・30 ④ 一括して「東京大学文学部国史学研究室」の札を付す。

203 長崎出島紅毛船輸入品目及入札買高大宝恵(47―3)

④ 「文学部後援会寄贈」のラベルあり。 ⑤ 和装、帙あり。

204 史蹟名勝天然紀念物保存法規(48―18―E)

② 内務省 ⑤ 整理番号48―18は一括されているので他と同様にC類に収める。

む (18—5) 亀浦一 (18—6) 黄海道鳳山郡砂里院古墳発見
見帯方太守張撫夷磚 (18—7) 同 (18—8) 河東一 (18—9)
磚? (18—10) 順天二 (18—11) 船津三 (18—12) 順天四
(18—13) 河東十七 (18—14) 磚? (18—15) 海天寺
弘法大禪師実相塔・鉄仏 (51—2) 松島海岸通集合写真 (222—14)

F 卒業論文など

a 磯部康吉 新撰姓氏録ナル氣入彦命ノ伝説ニ就テノ研究 (40—1—1)

著者は明治44年国史学専修科入学

b 楠田覚真 本願寺覚如を中心としたる鎌倉後期及南北朝前期之真宗 上下 (40—1—2 40—1—3)

著者は大正8年国史学選科入学

以上は金子広太郎の卒業論文(戦後)とともに箱に入れたり。

G その他

a 書簡 福岡市荒戸町二五 木下瀬太郎

b 山本三千雄 小楠公の研究 (一)

著者は京都市右京区西院巽町36。□□収 14. 5. 3 No. 20の印あり。原稿43枚を綴じたもの。

(二) 戦後の資料

① 戦後刊行の書籍

▼単行本

1 公卿補任 第四編 新訂増補国史大系 (231—19)

② 吉川弘文館 ③ 昭和20. 11. 15

2 続日本紀 新訂増補国史大系 (238—6)

② 吉川弘文館 ③ 昭和23. 2. 25

3 ヘーゲル全集 第11巻 哲学史上巻 (222—10)

① 武市健人・訳 ③ 昭和24. 11. 18

4 民生学論体系 第一巻 人生学論 (251—4—1)

① 岡本普意識 ② 民生館 ③ 昭和26. 5. 20

5 民生学論体系 第二巻 生活学論 (251—4—2)

① 岡本普意識 ② 民生館 ③ 昭和26. 5. 20

6 概説日本歴史 下 (24—16)

① 豊田武 ③ 昭和26. 6. 10 ④ 「東京都豊島区立長崎中学校印」 「昭和二十六年度入学生寄贈」の印あり。

7 図説日本歴史年表 (237—4)

① 日本歴史教育研究会 ② 森北出版 ③ 昭和24. 3. 1

⑤ 231—16も同じ

8 明代満蒙史料 李朝実録抄第一冊 (246—1—1)

② 東京大学文学部 ③ 昭和29. 3. 25

9 明代満蒙史料 李朝実録抄第三冊 (246—1—2)

② 東京大学文学部 ③ 昭和29. 3. 25

10 明代満蒙史料 李朝実録抄第四冊 (246—1—3)

② 東京大学文学部 ③ 昭和29. 11. 30

11 明代満蒙史料 李朝実録抄第六冊 (246—1—4)

② 東京大学文学部 ③ 昭和30. 3. 31

- 12 金光大神 総索引・注釈・人物志・年表(251—11)
- ① 金光教本部教序 ② 金光教本部教序 ③ 昭和30・3・22
- 13 新編世界史(24—9)
- ① 大類伸・吉岡力 ② 好学社 ③ 昭和31・1・10 ⑤ 高等
学校教科書
- 14 新編世界史教授資料(24—10)
- ③ 昭和31・1・10
- 15 日本史(史料練習)(222—11)
- ① 井上光貞・藤木邦彦 ② 東京大学出版会 ③ 1956・9・25
④ 「謹呈 著者」の札あり。
- 16 日本風俗史(上)(222—12)
- ① 和歌森太郎 ② 有斐閣 ③ 昭和31・10・15
- 17 近世史料抄影 第一(46—4—1)
- ① 近世史料研究会 ② 近世史料研究会 ③ 昭和32・3・1
- 18 近世史料抄影 第三(46—4—2)
- ① 近世史料研究会 ② 近世史料研究会 ③ 昭和33・12・1
- 19 中学校学習指導要領(222—13)
- ② 大蔵省印刷局 ③ 昭和33・12・10
- 20 伊藤常足翁顕彰録(222—7)
- ① 伊藤常足翁顕彰百年祭実施委員会顕彰録編輯委員 ② 福岡県
教育委員会・鞍手町教育委員会・伊藤常足翁関係文化財保存会
③ 昭和35・11・19
- 21 大阪の町奉行と裁判(237—2)
- ① 春原源太郎 ② 富山房 ③ 1962・10・15
- 22 世界の母国(222—21)
- ① 上原清雲 ② 皇祖皇大神宮奉賛会東海支部 ③ 昭和37・
1・1 ⑤ 「東京大学文学部史料調査研究教授会」あての手
紙(昭和36・11・9付)あり。
- 23 日本古代史私考 弥生式土器時代より大化改新(237—5)
- ① 清水寛次郎 ② 清水寛次郎 ③ 昭和39・7・10 ⑤ 「乞
御批評」の箋あり。
- 24 京都市上賀茂賀茂別雷神社社家 賀茂県主同族知新録(47—
5)
- ① 賀茂氏系図保存会東京分室 藤木顕文 ③ 昭和39・11 ④
「東京大学文学部国史学研究室」「65・2・15」
- 25 黒船陣中日記 附次郎長外伝(237—1)
- ① 野沢広行 ② 戸田書店 ③ 昭和41・1・1
- 26 井上哲次郎自伝(247—23)
- ② 富山房 ③ 昭和48・12・2
- 27 植木枝盛家族制度論集補遺(102—5)
- ① 外崎光広 ② 高知市民図書館
- 28 横浜為替会社日締帳・横浜為替会社身元金等日報
- ⑤ 横浜市史第三卷上 付録、2冊あり。
- ▼雑誌・抜刷
- 29 清代の緑旗兵
- ① 植木野宣 ③ 1953年 ④ 「史学会」印あり。 ⑤ 『群馬大学
紀要 人文』二卷三号の抜刷。
- 30 歴史学から社会科へ(102—7 a b)
- ① 酒井忠雄 ③ 昭和30・3 ④ 「国史研究室 30・6・16」
の印あり。 ⑤ 『大阪学芸大学紀要』昭和29年度の抜刷。2部

- あり。
- 31 我が国における文字以前のコミュニケーション法について(102—2)
- ①木森重樹 ③昭和31・3 ④「東京大学文学部国史研究室」印あり。 ⑤『大阪学芸大学紀要』第4号(昭和30年度)の抜刷。
- 32 松本城
- ②新建築社 ③1957・7 ④「史学会印」〔32・10・19〕あり。
- ⑤『新建築』32巻9号の抜刷。
- 33 武蔵大学論集 第5集(102—9)
- ③昭和32・10・15 ⑤英文
- 34 千代田区町名変遷表
- ①千代田区史編纂室 ②東京都千代田区役所 ③昭和33・2
- ④「史学会印」〔33・3・18〕あり。 ⑤『千代田区史資料第二輯』
- 35 宋元時代州県学産攷(一)(102—12)
- ①福沢与九郎 ④「史学会印」〔34・4・13〕 ⑤『福岡学芸大学紀要』第八号の抜刷
- 36 唐代憲宗朝の宦官について(102—8)
- ①福沢宗吉 ③昭和33・3・10 ④「史学会印」〔34・4・13〕 ⑤『熊本大学教育学部紀要』第六号の抜刷。
- 37 近世東亜交渉史の一前景(102—15)
- ①石原道博 ③1958・2 ④「史学会」印、〔34・4・13〕あり。 ⑤『茨城大学文理学部紀要』第八号の抜刷。
- 38 近世の変様式城下町に関する研究(102—6)
- ①松本豊寿 ④「史学会印」〔34・7・15〕 ⑤『地理評論』32巻4号の抜刷。
- 39 近世城下町の変質(102—16—2)
- ①松本豊寿 ④「史学会」1962・6・26
- 40 近世城下町の都市域構造(102—16—1)
- ①松本豊寿 ④「史学会」1962・6・26
- 41 太陽崇拜管見(102—4)
- ①糸満盛満 ③1962・11 ⑤『京都女子高等学校中学校研究紀要』第八号の抜刷
- 42 林業労働組織の体系化に関する研究(65—8)
- ②林野庁 ③1966・11 ④「史学会印」あり。〔FEB. 9. 1967〕
- ⑤林業経営研究所研究報告
- 43 聖武天皇と大仏造立
- ①杉山二郎 ③昭和43・3・30 ④「史学会」 ⑤『古美術』21号の抜刷。
- 44 桜田欽斎と大槻平泉
- ①平重道 ④「史学会」〔1968・7・29〕 ⑤『東北大学付属中学校紀要』第2集の抜刷。
- 45 INTISARI vol. No 3 (102-13)
- ▼目録
- 46 第十六回史料展覧会列品目録(48—12)
- ②東京大学史料編纂所 ④昭和二十四年十一月四、五、六日
- 47 広島大学寄託加計隅屋文庫目録 第一巻(236—3)
- ①小倉豊文 ③昭和38・11・30 ④「史学会印」〔1964・5・22〕 ⑤広島大学図書館より寄贈

48	大阪府文化財図説 彫刻編3 (47―2)	27	7	3	石田尚豊	続日本紀社会飢災史料 (11―18)
②	大阪府教育委員会	27	7	3	一橋智見	魏志倭人伝の解釈を繞る二、三の問題 (11―36)
	「66. 1. 10」の印あり。					
49	展観入札目録 (238―7)	27	9	19	藤本吉彦	木次八幡宮社家文書の一考察 (11―5)
②	三都古典連合会	27	9	24	宮地正邦	吉田神道の行法について (11―22)
	③昭和41. 5. 10	27	9	17	永山盛綱	日本芸能の史的研究 (11―35)
	④昭和41. 5. 10	28	1	14	黒板伸夫	藤原時代文化の研究―大江匡衡研究序説― (11―38)
②	旧制大学院・旧制学部生提出物	28	1	14	黒板伸夫	藤原時代文化の研究―枕草子研究序説― (11―39)
A	旧制大学院レポート (一括して「平」の札を付す、受領年月日順)	28	9	16	相良広明	明治時代の国民思想の一考察 (11―37)
26	1. 31	28	1	14	加納勇一	源頼朝の権威の根拠 (11―31)
26	9. 26	28	1	14	加納勇一	愚管抄を通して見たる中世初期に於ける所謂「道理」の一つに就いて (11―33)
	藤本吉彦					
	初期キリシタンの思想と日本の創造神話					
	についての一考察 (11―4)					
27	4. 18	28	9	16	宮島秀夫	研究過程の概要 (11―30)
	ト部生忍					
	古代文化の研究の中					
	文化形成の基礎と					
	混入の過程に関する考察二					
	海上航路に					
	関する篇 (11―13)					
27	4. 18	29	5	12	白木原和美	大学院第一年度報告書 東大学生運動
	ト部生忍					
	古代文化の研究の中					
	文化形成の基礎と					
	混入の過程に関する考察一					
	神祇に関する篇 (11―14)					
27	4. 18	30	1	9	百瀬今朝男	室町時代における物価表 第二部甲斐
	宇都宮勇					
	武州赤尾村の研究報告 (11―40)					
27	7. 3	30	2	9	峯村秀夫	宗門帳からみた近世村落の様相 (11―12)
	石田尚豊					
	続日本紀に於ける飢災史料の研究 (11―16)					
27	7. 3	30	3	23	水口敏之	明治初期の農政 (11―10)
	石田尚豊					
	続日本紀に於ける飢災史料一覽表 (11―17)					
30	5. 11	30	3	23	平岡定海	大和小東庄の成立について (11―11)
	宇部宮勇					
	大洲寛延文化騒動に就て (11―8)					

- 30 5 11 峯村秀夫 慶長三年の今井村検地帳に関する考察 (11—9)
- 30 6 8 五味克夫 大学院報告(五) 浦の形成と変遷 (11—15)
- 30 6 8 五味克夫 鎌倉御家人の番役勤仕について (11—21)
- 30 11 9 内川順雅 室町時代諸芸能の發達の社会的意義 (11—1)
- 30 11 9 内川順雅 風土記についての一考察 (11—2)
- 30 11 9 内川順雅 中世儒学の日本思想への寄与 (11—27)
- 30 11 30 佐伯有清 宮城十二門号と古代天皇近侍氏族 (11—28)
- 30 11 30 佐伯有清 新撰姓氏録に関する戦後の研究 (11—29)
- 31 2 1 成田瑞穂 昭和二八年度旧制大学院レポート (11—32)
- 31 5 23 峯村秀夫 村役人制をめぐる村内抗争について (11—24)
- ? 宮地正邦 吉田神道行事調査資料 唯一神道大護摩次第 (11—20)
- ? 宮地正邦 福島県双葉郡畿世橋村貴布祢神社三元十
八神道護摩行事次第 (11—26)
- B 学部生レポート (Aと一括)
- 立川修治 律令体制形成期に於ける仏教 (学部2年)
- 30 12 25 金子彦太郎 有島武郎論 (11—19)
- C 学部卒業論文 (大正期の専科生卒業論文と共に箱に入れる)
- 26 12 25 三浦茂一 異本水鏡 (前田家本) と流布本水鏡 (専修寺本) についての若干の考察 (学部生か) (11—3)
- 30 11 6 生か) (11—6)
- D 学部生提出ノート (一括して12)
- 峯村秀夫 北魏時代史、中央アジアトルコ民族史
- 今井 忠 北魏時代史 (2冊)、中央アジアトルコ民族史
- 中島素郎 最近における中央アジア史研究の進歩、中央アジアトルコ民族史
- 五十嵐和敏 北魏時代史、中央アジアトルコ民族史
- 杉山邦衛 中央アジアトルコ民族史
- 立川修治 中央アジアトルコ民族史
- 横田球生 北魏時代史
- 阪田寛夫 北魏時代史
- 長倉 保 北魏時代史、中央アジアトルコ民族史
- 黒岩義之 北魏時代史
- 細島 泉 中央アジアトルコ民族史
- 浪岡洋一 中央アジアトルコ民族史
- 某 西洋史概説